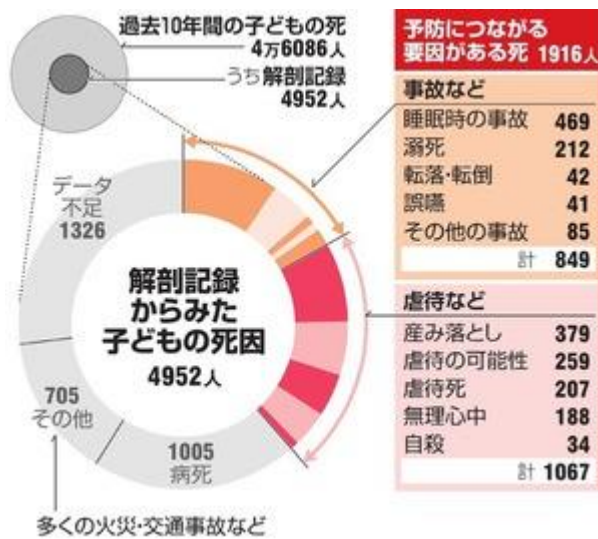


大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3220号 2016.8.28 発行

子どもの死を防ぐには 事故・虐待…記録4952件分析 朝日新聞 2016年8月28日



子どもの成長によってリスクは変わってくる 2

解剖記録でみる14歳以下の子どもの主な事故 (05~14年)

浴室での溺死 114件
食べ物との誤嚥 41件

歩き始め、食べ始め 1~2歳ごろ

自宅での事故が多い

防ぐには…

- 子どもだけで入浴させない
- 子どもの食事中はいつもそばにいて観察する

浴室で足入れつき浮輪や首浮輪は使用しない

浴室のドアを閉めたり、鍵をかけたりにして入れないようにする

縁の高さが50cm以下だと、乗り越え転落するリスク

子どもが2歳になるまで残り湯をしない

食事中に子どもがひっくり返るようなことは避ける

NPO法人「Safe Kids Japan」の発信による The Asahi Shimbun

子どもの成長によってリスクは変わってくる 1

解剖記録でみる14歳以下の子どもの主な事故 (05~14年)

うつぶせ寝 240件
添い寝 110件
寝具による窒息 84件
ベッドなどに挟まる 24件

赤ちゃん 主に0歳

睡眠中の事故が多い

防ぐには…

- 乳児が寝ている上にモノをつかさない
- 乳児用ベッドの柵はいつも上げる
- 敷布団は、顔が潜り込まない硬さを選ぶ

乳児期には、うつぶせ寝は避ける

寝ているそばに、乳児の口を覆うようなものを置かない

添い寝時に寝込まない

NPO法人「Safe Kids Japan」の発信による The Asahi Shimbun

子どもの成長によってリスクは変わってくる 3

解剖記録でみる14歳以下の子どもの主な事故 (05~14年)

プールなど自宅外での溺死 98件
転落・転倒 42件

外遊びが始まる 3歳ごろ～

屋外での事故が増える

防ぐには…

- ベランダや窓の手すり欄の高さは90cm以上に
- 屋外での水遊びの場合は、ライフジャケットを着用する

階段には転落予防の柵をつける

窓際にベッドやソファや椅子を置かない

踏み台となるものは窓や壁から60cm以上離す

NPO法人「Safe Kids Japan」の発信による The Asahi Shimbun

解剖記録からみた子どもの死因 小さいのちを守りたい——。睡眠時の窒息、浴室での溺れ、転落などで、子どもの命が失われている。痛ましい虐待や自殺も後を絶たない。朝日新聞は、過去10年間に亡くなった子どものうち約5千人について、原因などが書かれた解剖記録を専門家と分析した。約1900人の

記録から、今後起こりうる事故や虐待を防ぐための手がかりが見えてきた。

「母親の腕枕で就寝。目を覚ますと母親の左腕が覆いかぶさり、意識がない状態」。2014年に亡くなった0歳男児の記録からは、母親の添い寝中に起きた窒息だったことが読み取れた。

同じ年には、家族4人が「川の字」で寝ていたところ、0歳男児にきょうだいがかぶさり、亡くなった。分析では、添い寝や川の字で寝ていて亡くなった例が110件あった。

また、窒息などを引き起こす危険が指摘されている「うつぶせ」状態も240件あった。その8割近くは、まだ寝返りを打つのが難しいとされる「生後180日以内」だった。

このような睡眠時の事故は全体で469件あり、分析した中で最も多かった。リスクを減らすには、うつぶせ寝ややわらかい寝具を避けたり、なるべくベビーベッドを使ったりすることが有効とされる。こうした情報が社会でさらに共有されていけば、同じような事故を減らしていくことができるかもしれない。

今回、分析を試みたのは、05～14年に行われた司法・行政解剖のうち14歳以下の子どもの記録4952件。事件性の判断や死因の解明のために解剖されたもので、亡くなった子ども約4万6千人の約1割にあたる。記録は法医学者の間で研究用に共有されており、非公表だ。氏名などの個人情報はなく、原因や状況がある程度記されている。

事故予防に詳しい山中龍宏医師、日本子ども虐待防止学会長の奥山真紀子医師の協力を得た。日本小児科学会は今年、東京などの368の死亡例を、予防につながる要因があるかどうかの観点で試行的に分析しており、その手法や、子どもの死の検証制度がある海外の事例などを参考にした。

その結果、今後起きうる事故の予防につながる要因が読み取れたのは849件。睡眠時に次いで多かったのは浴室やプールでの溺死（できし）、転落・転倒、食べ物を気管に詰まらせる誤嚥（ごえん）などだ。

一方、虐待や無理心中、自殺など、社会的な対応によっては防ぎうる要因を見いだせる記録も1067件あった。うち379件と最多だったのが、出産直後の赤ちゃんを遺棄するなどの「産み落とし」だった。産み落としの全体を把握する国の統計はない。



里親推進40年啓発バッジ 読売新聞 2016年08月28日
「フォスターペアレントリボン」を作成した辻本さん（右）ら、ふたば里親会のメンバー（東大阪市で）

◇「ふたば会」 生活用品代補助へ販売

東大阪、八尾、柏原3市で、親と暮らせない子供を育てる里親らでつくる「ふたば里親会」が、里親制度を広めるためのピンバッジ「フォスターペアレントリボン」の販売など、啓発活動を始めている。会の創立40周年を記念した取り組みで、売り上げの一部は里親の支援に充てる。

里親は都道府県などから委託を受け、虐待や離死別などで親元で暮らせない子供を家庭で引き受ける公的制度。同会は里親や経験者ら約40人がメンバーとなっており、府の児童相談所と連携しながら、交流したり啓発活動を行ったりしている。

ピンバッジは、純粹さを表す白い子供の手と、輝かしい未来へと導く金色の大人の手をつなげて一つのリボンの形にした。フォスターは英語で「育む」という意味があり、里親同士だけでなく、実の親、学校教諭、児童養護施設などの職員、地域住民など、地域社会全体で子供を育む機運を盛り上げようという願いを込めた。

2000個を作成。1個500円で販売し、売り上げの一部は里親が子供を引き受ける時に必要となる衣類・生活用品の費用として補助する予定だ。

これまでに20人以上の里子を育てた同会の辻本真波会長（66）（東大阪市）は「里親だけでなく、多くの大人が里子を一緒に育てるパートナーだととらえてもらえればうれしい」と話している。

また、同会は現在、里親の体験記を冊子にまとめている。10月をめどにできる予定で、里親の研修会などで配布することも考えているという。ピンバッジの購入希望などの問い合わせは、同会(Hutabakai@aol.com)。

<家族のこと話そう>福祉の道歩み恩返し 社会活動家・NPO代表・藤田孝典さん

東京新聞 2016年8月28日



私が幼いころは両親と私、弟、妹の五人家族。小学二年からは父方の祖母も同居していました。両親とも父親のいない貧しい家庭で育ちました。父方の祖母は未婚の母で、父は主に曾祖母が育てたようです。祖母はそのあたりの事情はほとんど話してくれなかったですね。母は交通事故で父親を失った交通遺児。母方の祖母は子ども三人を一人で育てたそうです。

貧しかったので両親とも大学に進めませんでした。正社員として働くことができた。特に父は、高卒たたき上げでマイホームを構え、家にはピアノもありました。なので、私自身は貧困体験をせずに育ちました。

私は、ホームレスの人ら貧しい人を支援する活動をしています。私の両親たちの世代は家が貧しくても、今よりは恵まれていると思います。今は働く環境が様変わりし、非正規の低賃金労働者が多い。生まれが貧しいとその連鎖を断つのが難しいし、ちょっとしたことで簡単に貧困に陥ってしまう。私の著書のタイトル通り、われわれは「貧困世代」といえると思います。

うちの家では弟は父、妹は母とべったり。私は祖母派。小学生のころ、祖母と一緒に祖母の友人や親戚を訪ねて回りました。祖母は昔、福島県いわき市の炭鉱地域で暮らしていました。過酷な労働のせいか、友人には障害者や病気の人が多かった。皆さんが私をかわいがってくれました。そういう経験もあり、「おじいさんやおばあさんとのつきあいは向いている」「かわいがってもらった恩返し」と、高校生のころから高齢者福祉の仕事に関わりたいたいと思うようになりました。

大学院でも社会福祉を学びましたが、在学中の二〇〇五年にホームレスの人たちを支援する活動を開始し、現在もNPO活動を続けています。大学生のときホームレスの人とつきあいが生まれたのがきっかけでした。

祖母は、私が子どものころからよく「人にやさしく」と言いました。NPOをつくるときも「孝典はやさしいから、困っている人たちを助けてやって」と背中を押してくれました。その祖母は、半年ほど介護を受けた後、〇六年に七十七歳で亡くなりました。

妻はマスコミで働いています。社会問題への意識を共有できるのはありがたいです。長男は二歳。夕方、妻と私が毎日代わる代わる保育園に迎えに行きます。子育て仲間のお父さんたちからも、労働環境などの問題を聞きます。子どもが生まれて、子どもの貧困問題への意識がさらに強くなりました。

聞き手・白井康彦／写真・高嶋ちぐさ

<ふじた・たかのり> 1982年、茨城県高萩市生まれ。埼玉県越谷市在住。社会福祉士。2005年に埼玉県内でホームレス支援活動を始め、11年に「NPO法人ほっとプラス」を設立。全国各地で講演活動をするなど貧困問題に取り組んでいる。15年4月から聖学院大人間福祉学部客員准教授。著書に「下流老人」（朝日新聞出版）、「貧困世代」（講談社）など。

テレビ番組の「副音声」企画増加

朝日新聞 2016年8月28日

7月より放送されているフジテレビ系月9ドラマ『好きな人がいること』の第4話、6話で実施されたキャストたちによる“副音声”企画が注目を集めている。近年、『NHK 紅白歌合戦』やドラマ、アニメ、スポーツ中継などでの趣向を凝らした副音声が話題になることが増えているが、なかには主音声を食ってしまうほどのバズを起こすことも多い。従来、二か国語対応や解説を目的に使用されてきた副音声だが、昨今、エンタテインメント化が目立っている理由は何なのだろうか？ その狙いに迫ってきたい。

■従来はあくまでも主音声の補完 『トリビアの泉』影ナレなどで注目

桐谷美玲がヒロインを務めるフジテレビ系月9ドラマ『好きな人がいること』の副音声企画が話題だ。第4話では「真夏の激アツ副音声」と題し、柴崎三兄弟の三男・冬真役の野村周平と柴崎家の良き相談役・日村信之を演じる浜野謙太らが副音声企画に登場し、ドラマの展開に合わせて本音トークをさく裂させた。そんな「貴重な出演者のウラ話が聞ける」企画はファンからも好評を得たようで、第6話でも実施され、第5話でヒロインを思いつき振ってしまった長男・千秋を演じる三浦翔平と再び野村周平が登場して、波乱の展開を迎えた第6話を盛り上げた。

そもそも副音声とは、原則として主音声の日本語に対して、ニュースや海外ドラマを英語など外国語で聞きたい場合の二か国語対應用に使われているもので、他にも障害者向けのサービスとしてドラマの情景描写などを副音声で放送する場合がある。番組表や画面表示に〈副〉と表示されているものが対応し、放送中に〈音声切り替え〉ボタンを押すと聞くことが可能。NHKでは一部の番組で高齢者のためにBGMや効果音を抑えて、ナレーションの声を聴きやすくするといった副音声も提供している。

ただ、用途は多々あれど、従来はあくまでも放送の補完サービスとして捉えられていた。副音声を敢えてエンタテインメント化して番組演出として使う発想は、ゴールデン帯の番組ではかつてフジテレビ系で放送されていた番組平均視聴率20%を超える人気雑学バラエティ『トリビアの泉』が先駆けだったと記憶する。副音声から番組とは関係のない『ドラえもん』で馴染みのあるスネ夫の声（番組内ではシルエットとともに登場）が聞こえるなど、タレントやアニメ声優が「影ナレーション」となって解説する「おもしろ副音声」は当時、斬新なアイデアだった。それが聞きたいがためにチャンネルを合わせる視聴者もいたことだろう。

■SNSなどで“ざわざわ感”を起こすことでリアルタイム視聴に誘導

そして昨今ではそんな副音声企画が話題を集めることが増えてきた。例えばドラマでは、昨年9月『恋仲』でも副音声企画が評判を呼び、昨年はバナナマンやT.M.Revolutionらが出演した『NHK 紅白歌合戦』の「紅白ウラトークチャンネル」が話題に。さらにスポーツ中継などの大型番組でも遊びのある副音声演出されることもある。レギュラーのアニメやドラマで副音声にキャストや著名人を当てて放送する局も増えてきた。本来、テレビ番組を補完する存在である副音声の主音声を上回る存在になることもしばしばあるのだ。

副音声の活用が増えた理由のひとつに、地デジ化が挙げられるだろう。デジタル化によって音声も技術的に仕様が広がり、二重音声でもモノラルとステレオが選択できるようになった。デジタル化のメリットをいろいろと活かそうと取り組む放送局が増えたこともあって、その一環で「おもしろ副音声」も生まれている。また、放送局各局が命題として掲げている「リアルタイム視聴」を促す策のひとつとして捉えることもできる。SNS上での盛り上げ役として「ここでしか聞けないエピソードやキャストの素顔が聞ける副音声」が一役を担い、ざわざわ感を起こすことで、リアルタイムで視聴するきっかけを作っている。副音声は録画にも対応しているが、設定にひと手間必要で、中にはリアルタイムで気軽に楽しめる副音声を選択し、録画でじっくり本来の放送を味わう副音声フリークの視聴者もいる。

話題になっている副音声企画には共通項があるようにみえる。裏話や本音トークが聞け

ることももちろん思わず楽しめるものだが、視聴者の心理としてはそれ以上にその時間を出演者なり特別ゲストと共有できる“一緒にみている感”が最大の楽しみなのではないだろうか。今後、世界観にどっぷりハマりやすいドラマなどではスタンダードな手法になっていくのかもしれない。(文/長谷川朋子)

「第九」合唱、共に生きよう 川崎で31日 読売新聞 2016年08月28日

障害者とプロの音楽家がベートーベン交響曲第9番「歓喜の歌」を原語のドイツ語で歌う「しあわせを呼ぶコンサート」が31日、川崎市宮前区の宮前市民館で開催される。今年で17回目の恒例イベント。障害のある人もない人も音楽の力で一つになるステージが、多くの聴衆を感動させてきた。(岩島佑希)

このコンサートは、「幼い頃に聴いて感動したベートーベンの『第九』を原語で歌いたい」という障害者の男性の思いをかなえようと、同区在住の音楽家や福祉関係者が集まったのが始まり。

2000年に、約50人の障害者が「翼をください」などを合唱する1回目のコンサートが開かれ、翌年の第2回から第九に挑戦するようになった。今回は神奈川フィルハーモニー管弦楽団の演奏とともに、区内12か所の障害者支援施設などの利用者約150人が練習の成果を披露する。

参加施設の一つ、同区宮前平の施設「セルフ宮前こぼと」では16日、コンサートに出演する約15人が声楽家の寺沢直樹さん(59)の指導を受けた。

練習で使う歌詞カードには、ドイツ語を知らなくても歌えるようにする工夫がある。詞が日本語の語呂合わせで書いてあり、例えば、歌い出しの「フロイデ、フロイデ」は「風呂で、風呂で」、「ダイネ、ツァウバー」は「鯛ね、鯖」と表記されている。

うまく歌えない部分は繰り返し練習する。参加した原田奈々さん(35)は「歌うことは好きで、家でも練習している。今は少し喉を痛めているけれど、本番は大きな声で歌いたい」と笑顔を見せた。

同施設の長田正次主幹(54)は「人前で歌うコンサートは、障害者たちの活躍の場になっている。コミュニケーションを取ることが難しい人もいるが、歌を通して自己表現できるようになっている」と喜ぶ。練習が始まった7月、相模原市緑区の知的障害者福祉施設「津久井やまゆり園」で卑劣な事件が起きた。「コンサートでは改めて、『共に生きる』というメッセージを伝えたい」と力を込める。

コンサートは午後1時半スタート。第1部は障害者やプロの声楽家など総勢約200人が第九など3曲を歌い、第2部では声楽家のステージや神奈フィルの演奏がある。入場無料。先着800人。問い合わせは宮前区地域振興課(044・856・3134)へ。

【リオ・パラリンピック】ヴォーグ誌、義足の選手写真は健常者の加工写真だった キャンペーンHPに批判噴出 産経新聞 2016年8月28日

女性ファッション誌「ヴォーグ」ブラジル版が、来月開幕のリオデジャネイロ・パラリンピックの宣伝キャンペーンで、身体障害者に見えるよう加工した健常者2人の写真をホームページに掲載、「なぜ本当の選手を起用しないのか」などと批判を浴びている。

写真に登場したのはブラジル・パラリンピック委員会「大使」を務める俳優男女。男性は右脚が義足で、女性は右腕がないように見える。車いすバレーボールと卓球のブラジル選手をモデルにしている。

写真が公開されると、パラリンピック選手に焦点を当てるキャンペーンに健常者を使うことを批判する声がネット上で相次いだ。

ある障害者のモデルの女性は「メディアは健常者が障害者のふりをしてもいいと思っている。私は障害者ではなく(普通の)少女の役をもらいたい」と語った。(共同)

障害者スポーツの魅力を知って 3日に千葉市で競技体験会

東京新聞 2016年8月28日

二〇二〇年東京パラリンピックで、車いすフェンシングやシッティングバレーボールなど四種目の競技を開催する千葉市は、九月八日に開幕するリオデジャネイロ・パラリンピックを前に、パラスポーツの魅力や面白さを市民に広く知ってもらおうと、三日に体験会やトークショーを開く。また、パラリンピック期間中は、千葉中央公園や海浜幕張駅など市内各地で毎日パブリックビューイング（PV）を開催する。

東京パラリンピックでは、千葉市美浜区の幕張メッセで車いすフェンシング、シッティングバレー、ゴールボール、テコンドーの試合がある。熊谷俊人市長は「千葉市を車いすスポーツの聖地に」と掲げ、千葉ポートアリーナに専用のパネルを設置するなど、車いすスポーツの国際大会の誘致などに力を入れてきた。

三日は午前十一時～午後二時半、千葉市中央区の千葉ポートアリーナで、車いすラグビーや車いすバスケットボールなど六種目の体験会を行う。シッティングバレーとゴールボールは事前に申し込みが必要。参加無料。問い合わせは、市スポーツ振興課＝電043（245）5966＝へ。

PVは、八～十九日の朝（午前七～十一時）、昼（午後一～三時）、夜（午後五～七時）の一日三回、大型のビジョンカーで海浜幕張駅前や千葉中央公園など各地を移動して実施。試合の生中継や録画映像のほか、パラスポーツの競技やルールを映像で紹介する。

十七～十九日は海浜幕張駅南口で、パラスポーツ選手の実演や講演会などに加え、障害者雇用の啓発イベントも開かれる。市オリンピック・パラリンピック推進室は「多くの市民に障害者スポーツを見てほしい。体験し感じることで理解を深めてもらいたい」と話している。PVの日程は一日以降、市ホームページなどに掲載する。問い合わせは同室＝電043（245）5049＝へ。（柚木まり）

設備や授業、障害者配慮広がる京都の学校 差別解消法4カ月

京都新聞 2016年8月28日

体育の授業でコーンの間を電動車いすで走り抜けるメニューに取り組む小林さん。そばで中村講師が見守る（京都市伏見区・洛水高）



障害者に必要な配慮を公立学校などに義務づけた障害者差別解消法の施行から4カ月がたった。京都府内の学校でも児童・生徒の障害の特性に応じて設備を改修したり、授業内容や指導方法を工夫するなどの取り組みが広がっている。一方で同法が求める配慮には明確な基準がなく、学校側からは「どこまで対応したらいいのか」との戸惑いも聞かれる。

■「どこまで対応すれば」戸惑いや模索も

7月上旬に洛水高（京都市伏見区）であった体育の授業。1年生の男子生徒が剣道に取り組む体育館の一角で、小林飛翔さん（15）は床に並んだコーンの間を電動車いすで走り抜ける練習に励んでいた。見守る中村徹講師が「手前で速度を出した方がいい」と助言した。

小林さんは筋ジストロフィー患者で重い身体障害がある。同高は入学が決まった直後から保護者や通学していた中学校と話し合い、対応策を検討した。

体育は他の生徒と同じ内容はできず、車いすを操作する特別メニューで評価する。小林さんを介助する講師2人を配置。階段の上り下りのため昇降機を導入し、トイレも車いす

仕様に改修した。小林さんは「先生たちのおかげで高校生活を楽しめている」と笑顔を見せる。

同高が小林さんのために整えた環境は障害者差別解消法が規定する「合理的な配慮」に当たる。障害のある子どもも平等に教育を受けられるようにするため、学校が過度の負担にならない範囲で必要な変更や調整を行うことを指す。ただ、障害の特性や程度はそれぞれ異なることから各校は対応を模索している。

醍醐西小（伏見区）では発達障害の可能性のある児童のために教材や教え方に工夫を加えた。文字の読み書きが苦手な場合は教科書の文章にルビを振ったテキストを用意したり、教科書を音読するソフトを保護者に紹介している。筆算の手順を分かりやすく示す計算用紙も作った。授業についていけない児童には予習を実施し、理解度を高めている。通級指導担当の畑中崇伸教諭は「一人一人の児童に合った支援をすることで学習意欲を引き出せる」と取り組みの意義を語る。

発達障害への対応は市全体でも進む。市教育委員会は今年4月、小学校教員に対し、すべての児童にとって分かりやすい授業をするための点検表を配布した。中学、高校にも学習障害のある生徒を支援するためのガイドを提供した。

i P S細胞観察も 医学体験イベント始まる 大阪日日新聞 2016年8月28日

体験を通して最新の医療や健康づくりを学ぶ催し「なるほど医学体験！ HANSHI N健康メッセ」が27日、大阪市北区のハービスホールで始まった。人工多能性幹細胞（i P S細胞）の展示や医療器具を使うコーナーなど多彩な企画が用意され、子どもから大人まで楽しみながら理解を深めていた。29日まで。入場無料。



i P S細胞を顕微鏡で観察できるコーナー＝27日午前、大阪市北区のハービスホール

医療や福祉分野の変化が激しい中、普段生活している地域の医療環境を知ってもらおうと、神戸大や阪神電気鉄道らでつくる実行委が初めて開催した。

会場では、i P S細胞を顕微鏡や大型モニターで観察したり、内視鏡を動かして治療の技術を体感できるコーナーなどを設置。液体窒素を使った実験をはじめ多彩な企画があり、参加者

らは医療や科学の世界を満喫していた。

顕微鏡で細胞や組織を調べる病理医の体験コーナーで、肺の細胞や作物を観察した前川大和君（8）＝兵庫県三木市＝は「オクラの毛がスカイツリーの形に見えてすごかった」と好奇心をかき立てられていた。

女性のかばん強奪未遂容疑、重度知的障害の30歳男を逮捕 大阪府警

産経新聞 2016年8月26日

かばんを奪おうとして女性にけがをさせたとして、大阪府警大正署は26日、強盗致傷容疑で、大阪市大正区の無職の男（30）を現行犯逮捕したと発表した。同署によると、男は重度の知的障害があるとみられ、「覚えていない」と否認している。逮捕容疑は、25日午後5時55分ごろ、大正区千島の団地の駐車場で、徒歩で帰宅中だった女性（25）のショルダーバッグを奪おうとして転倒させた上、引きずるなどして軽傷を負わせたとしている。同署によると、男は女性に抵抗されたため、バッグを奪わずに逃走。現場から約200メートル西の団地内で駆けつけた署員に取り押さえられた。男は負傷した女性宅の近所に住んでおり、面識があったという。

プレミアム商品券、低所得高齢者向け臨時福祉給付金の効果検証へ

産経新聞 2016年8月28日

政府は27日、平成26年度補正予算に発行財源を盛り込んだプレミアム付き商品券と、27年度補正予算で手当てした低所得高齢者向けの臨時福祉給付金について、消費押し上げ効果を検証する方針を固めた。商品券に関しては、一部について9月の臨時国会召集前にも取りまとめる。低迷する個人消費をより効果的に刺激するため、検証結果を今後の経済政策の立案にいかす考えだ。

プレミアム付き商品券は、地方創生交付金約1600億円を活用し、約1700自治体が発行。額面より原則1～3割上乘せした額の買い物ができる。給付金の財源は約3600億円で、住民税非課税の65歳以上を対象に一律3万円の現金を配っている。

今回の検証では、利用者が商品券や給付金を使い、実際にどのような消費行動を取ったかを調べる。具体的な用途や、商品券や給付金がなければ購入しなかったものが総額に占める割合などを算定し、どの程度の消費拡大効果があったか分析する。

また、商品券発行や給付金支給は事務コストがかかりすぎるとの指摘があることから、検証結果は費用対効果の見極めにも活用する。

商品券に関しては、すでに自治体を通じて調査を開始した。給付金は早急に調査手法を決めて作業に着手する。

個人消費は節約志向や若年層の将来不安を背景に力強さを欠き、景気回復の重しとなっている。政府は消費喚起を重視しており、2日にまとめた経済対策には、低所得者に対する1人1万5千円の現金給付や、年金受給資格が得られる期間の25年から10年への短縮を盛り込んだ。

北斗星

秋田魁新報 2016年8月28日

「椎の木の暦」（中央公論社）は終戦前、福井県の山あいの分教場に赴任した若い男性教師と二十数人の児童が織りなす物語。作家水上勉が実体験に基づいて書き、1979年に小紙朝刊に連載小説として掲載された▼幾度か映画化された壺井栄の「二十四の瞳」と共通点が多い。舞台は瀬戸内海べりの村と日本海側の山間地と異なるが、いずれも小さな分教場の教師と児童の温かな交流を描き、卒業後の再会シーンが胸を打つ▼壺井が反戦メッセージを伝えているのに対し、水上の小説は障害者問題について考えさせる。前任の教師が登校を拒んだ知的障害のある女兒を、男性教師が分教場に迎え入れたことで子どもたちが団結する。女兒はやがて欠かせない仲間になっていく▼小説には足の不自由な女性教師が、分教場へ向かう冬の山道で遭難死する事故も描かれている。後に書かれた随想によれば実際にあった事故らしい。「吹雪の日になぜ」と嘆く男性教師に、車いすを使う娘を持つ水上の姿が重なる▼この小説を再読したのは1カ月前に起きた相模原殺傷事件がきっかけだった。障害者に対する容疑者のゆがんだ差別意識に衝撃を受け、対極にある温かな物語に手が伸びたのだ▼15年ほど前に取材した障害者施設で買ったコーヒーカップを今も愛用している。授産施設で作られたお菓子や農産加工品は、最近のわが家の定番だ。それらを眺めていると、ひたむきに作業する障害者の姿が目に見えよう。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も

